

研究

申蔵の鯨の大魚 (二)

——中浦湾での漁の歴史をたどる——

賛助会員 安部弥右衛門

(承前)——明治十七年きんせう甲申の暮る日、中浦湾に鯨の大魚があり、

今たに古老たの語り草になつてゐる。

ところが、右の二つの伝説の外に、さらに一つの伝説があつた。それは元治元年生まれの西岡政蔵という、網元でもあり、また村会議員、総代、佐長などの名譽職を歴任した有力者の老人が、孫にあたる克己氏に、よく次のような話をしていたという。

その日、今津の神り網は、狸が浦の番であつたので、網船はその網代沖に仮泊し、ムラギンは衣浦の上の松の根方にある魚見の場所から海面を見張つてゐると、宇土嶋の沖に鯨の大群が現われた。素被こそと、その浮遊道路を見守つてゐると、地方の広浦・猿戸には近よらず、也也西に当る羽出浦の敷場網代に向こうようであつたので、ムラギンは直ちに大罾おほしほで合圍して網船をその方面に急がせ、ムラギン達もムを大急ぎに山を下り、小船に乗つて網船の後を追つた。

これを見ると、猿戸や高嶋たかたけの網代で待機してゐた網船もムラギンも、皆敷場網代に向つて急航することになり、先刻まで静かであつた中浦湾は、海泣うみなみ・猿鳴さるなき・作しやく網代あみのしろだから登進する網船も多数で、まさに壯烈な大活

劇が演じられることになつた。

神力網は有利にも敷場網代にもまっ先に着いて、未撈した大魚群を首尾よく網の中に包圍することに成功した。この時分、上の倉の大黒網と、東の若戎網は、先着を争ひ競着となつた。双方の乗組員が、死力をつくして敷場網代に着く直前には、軋々相摩する状態になり、双方が打潜を止めた時には、東の若戎網が大黒網を尺余抜いてゐたようであつたが、船が全く進行を止めた時には、上の倉の大黒網が、逆に尺余若戎網を抜いた状態になつたので、忽ち双方の網船が大論争を起こした。

「大黒網がたどり上げて抜いたのだ」

「いや、これだけ自然に抜いたのだ」

と、気が立っている漁夫同志、あわや直接行動に出ようとするこの時、大魚群は目の前に迫つた。

さすがに両網のムラギンは、逆る若者たちとなだめる一方、双方談合の結果、くじ引きで二番網・三番網をきめることになり、くじ引きの結果二番網は大黒網、三番網は若戎網と定まつた。それでこの場はおさまり、つぎに後網の位置について標葉をはじめた。

四番網は出来網であつたが、どうしたことから三番網の袋の上は、自分の網を置きかぶせたので、三番網の標葉が困難になり、かつ漁利も案じられるので、双方大喧嘩になつた。しかし三番網にはかたりの漁獲があつたけれども、四番網の出来網は、三番網の袋の上に岩網を置いたので、網が宙に浮き、鯨は岩網の下とくぐつて次の五番網に移つてしまひ、格別の漁獲はなかつたという。

当日の主な漁獲は、

- 一番網 神力網 鯨八千尾余
- 二番網 大黒網 一万尾余
- 三番網 若戎網 (相当量)

四番網 出来網 鉾 極々僅少(前記過失による)

五番網 以下、相当量または僅少(まちまち)

とにかく、羽出浦の網四帖の外、中越浦と有明浦の網全部、合せて十二帖が操業したということである。

このように鉾の大漁はよって、部落も網元も引子の家も、一度は春が来たような気分になり、当分は我が世の春を謳歌したのであった。しかしそのもうけは何時の間にか消え失せたものか、私たちが郷土の繁栄は長く続かなかった。

毎年型のように続いてあつた鰹漁も、次第に減って行き、鉾の大群の来漁も年々に見られなくなつた。したがって漁業による収入は激減するに反して、一時高まつていた網経営者(網方)の生活様式はそのまま続き、放漫な事業経営も重加して、明治三十年頃には益々斜陽の色濃く、漁業収入は激減した。一方、金利の増大は甚だしく、網元の倒産と、網元近親家庭の連繫悲劇となり、明治の終り頃までには、既存の小引網の網元はほとんど廃業して、中浦湾には威勢のよかつた小引網の姿を、もう見ることはできなくなつた。

なぜ急転直下、漁がさびれて、村を挙げて窮境に陥つたのであろうか。それには次のような理由が挙げられると思ふ。

⑤ その後の漁村はどうなつたか

その第一は、鰹も鉾をばじめ、各種魚群の来漁が年々減少したことが考えられる。

数年続いた鉾の回漁に、子麩味を占めた漁民は、鉾漁に全霊をうち込んでしまつた。そして鉾群は鰹とちがつて浮游せず、水中深く游ぎ、稀に浮遊しても移動が速いので、前々から網船が網代沖で待機しておらねば捕提す

ることは困難である。そこでよい網代番に当つた網は、ムラギンは魚見の山に登り、引子は一回網船に乗りこんで、網代沖の海上に仮泊し、朝から晩まで船の中で遊んで、寝たりして、毎日空しく日を過ごす。

中には網糸を持ちこんで網すきをやる人があるが、船の中であるので蒸仕事は不向きで、草履作りなどは出来ない。眠る外は他愛のない話だけであるが、それも毎日のことでは話の種もつきる。

昼食は、特設の「飯取り船」で、若い漁夫が家から集めて運ぶ。

このようなことが十一月から翌年の二月まで、約四か月ほどつづく。網船の引子たちは鉾漁のなままたまの間、毎日針当持参である遊びである。畑仕事は遅れる。収入はとだえる。鉾漁はめつたにない。もしたまたまつてもほんの一部の網だけ、多くの網は、網元も引子も無収入である。

こうなると網元は気があせる。一攫千金を夢見て、他の漁場に出漁を考へる。これは危険の多い長途遠征である。よそから高利の資金を借り入れ、漁網・漁具を整え、大勢の引子を連れて、宮崎・鹿児島・四国・和歌山等の遠方に新たな漁場を求めて、新天地の開拓に乗り出す。

その壯烈は稱賛に値するところであるが、事前調査など万全をつくしたか、その辺に欠陥があつたのではないかとすべての網が不漁で困っている時である。一帖の網が動けばそこは漁師心理である。どの網もそれに倣つて行つた。われもわれもと出漁したが、成功はむつかしい。

のほはじめに予想したような魚群の来漁がない。四岩礁などの支障もあり、漁場が悪く操業できないことがある。

い潮流、風波などで操業が難儀である。
など、意外に支障が多く、用意していた資金は尽きる。
船や網はいたみ、中にはたくさんの網をくさらせるなど、
他県の遠方に出漁した網は、何れも不成功であり、多大
失敗であった。

大打撃を受けて帰って来た鰯網は、その冬からまた例
の御番をはじめめる。相変わらず昼飯は例の飯取り船で運び
春になるまで海上で遊んで魚を待つが、容易に魚は来な
い。たまたま来て小群で物にならず、漁師の生活はま
すます苦しくなるばかりである。

それでも網元の親方は、依然厭厭然たる生活様式を交
えることができず、明治年代の終りまでほとんど倒産
の状態になったことは、気の毒の至りであった。

この行詰りの時機が意外に速く来たことは、前記のよ
うに魚群米游の減少と、放漫な事業経営にあること勿
論であるが、次の事情も業者の倒産を早やからしめた最
大の要因であったと思う。

明治の終りごろには、政府も漁業の振興奨励を唱え、
事務的には指導方針も樹立していたが、事実上の活動は
漁業界の末端までは浸透せず、私たちの村へ当時東中浦
村へは漁業会または農業会はあっても、それはほとんど
村役場の帳簿上の存在であつた。漁業会長も農業会長も
事務担当の村役場書記の兼任という状態で、会は有名無
実であつた。その上漁業振興または維持についての機構
や、金融機関なども完備しておらず、網元の多くは事業
経営に必要な資金と、低利資金に仰ぐこともできず、専
ら付近町村の資産家または金融業者から、高利の金を借
りて経営していたので、倒産に追いこまれたのである。
ところが、当時小糸網を堅実に経営していた、羽出浦
の坂本三津蔵、東兼蔵の二人が、後年小引網に規模を拡

めて、部落に小引網を維持し（鰯網はもたず）、イリコ
の漁獲を主目的として、熱心に事業の振興につとめ、
ようやく發展の機運に向つていた。

そこに北海道部方面から、灯火と利用した鰯網の知
識と技術を導入して漁獲量を増すと共に、新規計画の網
敷も急激にふえ、大正から昭和年代にかけて、投入網漁
の最盛期を迎えて、再び漁村の春を改歌するようになった。
羽出・中越に投入網をはじめて伝えたのは、東上浦
村津井の森崎友吉という人であつたという。

大正年代から昭和にかけて、投入網は多く小巾着網に
代わり、網船の集魚燈の数も無制限に増加したので、漁
獲も急激に上昇したのであつたが、濫獲の弊害が間々
なく起こつた。鰯の漁獲が減つて来たのである。

業者はこれを知ると、直ちに集魚燈の数を制限するよ
う呼びかけしたが、それは実行されず、漁獲は減るばかり
で、一時は網元の収入は皆無に近いまでになつた。そう
なると引子の中には漁業を見限り、網によつては操業も
困難になり、出漁を控える網も出来るようになった。

こんな状態になつていた時、中越浦の安倍弥太治氏が
佐伯町から村出身の加嶋勘治郎氏を連れて帰り、網元の
人々を役場に集めて、電気集魚燈の安全であり、石油集
魚燈よりばるかに効果が多く、また経費も少なくてすむ
ことを説き、その採用を勧告した。しかし一回はその切
替へに多大の資金と必要とするのでこれに賛同せず、安
倍氏ただ一人試験的にこの電気集魚燈を使つたところ、
その効果は著しく、安倍氏の網は他に抜きんできて多くか
魚を取ることに立証された。そこで網元は争うて電気集
魚燈を使用するようになり、また豊漁に恵まれるようにな
つた。

たまたま昭和十二年に起こつた支那事変は、次第に規

模が拡大し、兵役関係者はつぎつぎに召集されて出征したので、網の引子が足らぬようになり、婦人も網船に引子として乗組むことになったが、尚不足するものでついに小学校の高等科の男生徒と乗せたりしたが、尚不足で操業は困難となった。

支那事変は、ついに大東亜戦争となって、村には若いものは殆んど居なくなつた。おまけに空襲は一層はげしくなり、昼も夜も漁は全く出来ない状態に追いこまれた。

昭和二十年八月終戦となり、生き残つていた従軍兵士はつぎつぎに帰つて来た、網船に乗る引子の数は急にふえ、網によつては乗組員が多すぎる状態となり、郷土の漁業は生色ととり戻すに至つた。

しかしそれもつかの間、終戦後各地に復興事業や建設工事が起こり、朝鮮戦争が、且つ怒するに及んでにわかに景気がよくなり、働く職場が多くなった。債銀なども高くなったので、青壮年はもとより、六十歳前後までの労働者は、半つて村を出て遠いところまで職場に赴き、村はまた老人と婦人と子供だけとなり、網漁業など全く経営出来ぬようになった。網はわずかに羽出浦に一帖、猿戸に一帖、広浦に一帖ということになり、大多數の網元は休業又は廃業した。前記三帖も地元では人手が足らず、他部落から引子を雇っているのが実情である。

今では婦人も子供も連れて出稼ぎしている家が多く、老人だけが家の留守番をしている状態である。

しかし、村には鮫(はまち)養殖漁業が一組合だけあり、外におかめ養殖養と、海苔(のり)養殖も試みられたが、いずれも一、二年でやめてしまった。

村に家は建つてはいるが、出稼ぎで全戸不在か、また

は老人がひっそり暮らしている過疎現象が見られる。海岸から山のつべんまで耕していた段々畑は、今はほとんどすてかえり見られず、一面の豊野となっている。松といふ松は片一端から松喰虫の被害で赤く枯れ、残っている松も、全滅の日が近いのである。ただその荒れ果てた山の中に、鶴貝半島で有名な万里の長城、猪垣が取り残されていることを思うと、つくづく歴史の変遷を感えずには居れない。

しかし、この過疎の村にも近頃はしきりと住宅が新築されている。これは土木工事などに出稼ぎして来た人達によるものが多いのである。

それはそれでよからう。然し今過疎の状態にあるのが郷土が、海に生きる漁村として漁業による生産ととり戻し、段々島と高度に活かし、安定した繁栄の新しい時代を求めようではないか。

追記

明治・大正のころ、村の漁夫はよく、鰯(いわし)や鰯(まぐろ)の群が鰯を追うて地方に寄つて来るとか、鰯に追われて逃げこんで来るとか話していた。しかし濫獲による魚類の減少とか、海流の変化による魚の回游の關係などを終末の關心をもつていなかった。

「まあ、くちかことばかい。海の潮の辛い間は、きつと魚は寄つてくる。おおかか喰い(鰯)の鰯でも一網引けば、今の苦勞は一べんに忘れてしまふよ」

と、家の軒先や、網干浜で網つくるいしている老漁夫はけなげにもこう話す。それは気やすめの言葉とききより、やはり漁村の人々の夢であり、希望の言葉としてうけとめたい。

(おわり)